

最優秀賞

僕と父

京都市立御所南小学校 5年 近藤慶一

普段優しい僕の父親は、机の上がちらかっているときは真剣な顔で怒ってくる。僕はそう言われてもいつも生返事だけで、片付けることはしなかった。

だって僕は片付けが苦手だ。学校の道具箱はグチャグチャだし、家の机の上だって教科書や鉛筆が出しっぱなしだ。どうせすぐに使うんだから、そのままにしておいた方が効率的じゃないかとさえ思っていた。

でもある夜に、珍しくビールを飲んで赤い顔の父親が「俺も片付けが苦手でよくおじいちゃんに怒られていたんや。」と教えてくれた。「片付けがでんやつは何をやってもだめなんや。勉強も仕事もできるわけない。」というのが祖父の口癖だったらしい。「大人になった今は、その言葉の大切さがよく分かるんや。」父は酔っ払っていたのに目だけ真剣にこちらを見ていた。僕は、なんだかどきりとした。ご飯を急いで食べると、久しぶりに机の上を片付けてみた。何も置かれていない机の上はピカピカで、自分でも不思議なことになっちゃって勉強でもしようかという気持ちになった。その日のうちに夏休みの宿題を終えた僕をみて、「俺の言った通りやろ。」と笑う父親。なんだか少し嬉しかった。

僕に祖父の記憶はほとんどない。唯一覚えていることは、病

院のベッドで苦しそうに寝ている姿だ。でも、父親の話を聞いて、ほとんど話したこともない祖父のことが、なんだか身近に感じられた。もしかしたら祖父も祖父の父親から同じことを言われたのかもしれない。もつと祖父のことを知りたくなった。父親に聞くと、「じいちゃんのこと、色々また教えたるわ。」と言ってくれた。楽しみだ。

僕もいつか子供ができるだろう。同じように片付けが苦手な息子かもしれない。そしたら、祖父と父からつながってきた言葉を、今度は僕の口から伝えたい。

（審査評） 日常の何気ない出来事を書いた結果、うまく今回のテーマの「つながり」に帰結していると思いました。実際に使われた言葉や状況の描写、また心の声の挟み方が臨場感を生み出し、読み手を引き込んでいます。一つの文を長くせずに完結させているところが心地よいテンポを生み出しています。全体的に自然で計算されているように感じず、流れるように読み進めることができました。

酒井久美子